アンラーニングプロジェクト2010前期

2010. 5. 16

生・労働・運動ネット
富山市神通町3-5-3
TEL 076-441-7843
FAX 076-444-6093

ニューズレター

「思考錯語：沖縄の〈声〉と呼びかけあう政治表現を考える」(4/11)での論議から

今、沖縄から発せられている「私たちの〈声〉を聞け！基地をどけろ！」という〈声〉と、日本(ヤマト)の私・たちが互いに呼びかけあうことに向けて、4月25日(日)、「生・労働・運動ネット」では、「路上会合：沖縄の〈声〉と呼びかけあう私・たちの〈声〉を！」と題するデモ・街頭アピールを、20数名の参加者と共に富山市中心街で行いました。

4月11日(日)、その「路上会合」で私・たちは街頭から何を訴えるのかを考えあうことに向けて、「アンラーニング2010年前期企画　私・たちと沖縄――〈と〉のざわめきから／へ」の第3回として、「思考錯語：沖縄の〈声〉と呼びかけあう政治表現を考える」を行いました。その中で、日本(ヤマト)の私・たちが沖縄の〈声〉とどのように呼びかけあうのかをめぐる提起や、フリーディスカッションが行われました。また、当初、「アンラーニング09年後半期」の「思考錯語：政治を路上に解き放つ」として予定していた報告も、それと併せて行われました。以下、当日の論議のアウトラインを紹介します。

□はじめに――私・たちは決定的に立ちおくれている

この何ヶ月間、私たちは、現政権が次々と提示する普天間基地の「移設案」をめぐって、「一喜一憂」させられるという状態が続いています。それは、ある意味では馬鹿らしいことであるし、「問題の本質はそんなところにはない」と思いながらも、事態の進み方に振り回されているような時間を私自身が過ごしてきました。しかし、現政権が「普天間問題」にどう「決着」をつけるのかということとは別に、私・たちの側が沖縄の「ざわめき」にどう向き合うのかという課題が間違いなくあるはずです。

現政権は、昨年末から、普天間基地問題について、「右往左往」していますが、それはもちろん、自然にそうなったわけではありません。沖縄では、自分たちの生きることの根底まで米軍基地によって侵害されていることを改めて問いなおそうとする動きが、90年代半ばから、大きく高揚してきています。そのように、沖縄の人々が、米軍基地に対する怒りや拒否の意思を政治的に表現し続けてきたことが、現政権をここまで追い詰め、揺るがせているわけです。

4月25日に、私・たちは、「基地をどけろ！」と叫ぶ沖縄の〈声〉と呼びかけあうことに向けて、富山の街頭でデモを企画しています。その日、沖縄では、普天間基地問題をめぐる大きな集会が行われる予定になっていますが、おそらく10万人規模の人たちが集まるだろうと思います。沖縄でそれだけの人たちが集まるという運動の勢いは、残念ながら、日本(ヤマト)の私たちの側にはありません。また、沖縄の人々の動きに呼応する私・たちの側の政治的な表現というのはどのようにあるのかということ自体が、私自身も含めて不鮮明であるように思います。まして、沖縄での動きに応答することを運動とし

てどう組み立てるのかということでは私・たちは決定的に立ちおくれていますし、それを一挙に回復することはほとんど不可能なように思います。

少なくとも、アジア・太平洋戦争以来、古くは、明治政府による「琉球処分」や薩摩藩による「琉球侵攻」までもさかのぼるような、日本（ヤマト）と沖縄との長年に及ぶ差別的・抑圧的な関係があります。そのことをきちんとつめて考えるということを、私・たちはしないで済ませてきたわけですが、それを本当にどう解くのかという時に初めて、私・たちは、普天間基地問題に対する政府の対応に「一喜一憂」しないようなところに立つことができるのではないかと思います。

□政治を「路上」に解き放つ

以上のような提起の後、今、私・たちが街頭で直接、声を上げることがどのように新たな政治の可能性を切り開くことにつながるかを考えあうための素材として、「政治を路上に解き放つ」と題して、「民衆にとって政治とは何か」（和田伸一郎著・人文書院）の『序論　街路への権利』の概要が紹介されました。同書の著者は、現代フランスの哲学者ジャック・ランシエールの思想を手がかりに、〈社会的なもの〉と対比させながら、「政治」の復権を訴えています。

社会保障・福祉制度に代表されるような、私たちの「生」を支える〈社会的なもの〉は、「より貧しい者」や「より弱い者」への保護と引き替えに、公的事項の取り決めに対する発言権や決定権という重要な自由を取り上げるという両義性をもつものです。人間が各自の社会的な役割・有能さに応じて「分け前」を受け、特定の地位を占める共同態的なあり方を、ランシエールは「ポリス」と呼んでいます。政治が行われる公的領域は「ポリス」の外部にあり、「ポリス」の内部にいる者たちは、政治的な取り決めの「舞台」へのアクセスが構造的に不可能にされています。

現在の議会制民主主義の下で、私たちには投票の権利や、政党・政策の選択の自由が与えられているようでいて、選挙や代表制は、原理的には、上からの意見を選挙民に承諾させるためのものでしかありません。議会制民主主義というものは、あくまでも、少数の特権階級の支配の維持のためにある「寡頭的」なものです。

公的領域での取り決めに発言する資格を奪われることで、民衆は〈社会的なもの〉の中で、「住民」としておとなしく投票に行くか、「クレーマー」として個人的に社会的な保護の不十分さに苦情を言うことだけがかろうじて残されることになります。そのことによって、インターネット上のブログに見られるように、〈社会的なもの〉の中での「愚痴」・「苦情」はますます私的で「汚い」言葉になると同時に、人々は互いに対立させられ、孤立化していきます。そのように、民衆が自らが被る不正についての感覚を表明するための言葉を話す「政治的動物」としての「人間」とは認知されないことを、ランシエールは、特権階級による〈侮辱〉と呼んでいます。そうした特権階級による〈侮辱〉が、現在の私たちの無力感や、徒労感、惨めさを生み出しています。この間の派遣社員や「フリーター」、「ニート」の問題は、「ポリス」内部の地位・「分け前」から誰を排除するのかという政治的な「分割」の結果に他なりません。彼（女）らの問題を、貧困による疎外、孤独、無気力として「社会問題」化するのではなく、民衆の政治的な「無力化」によって少数の特権階級が利益を得るという構造こそが問われるべきではないでしょうか。

日頃、「分断」・妨害されている〈社会的なもの〉の「外」への接続を私たちが果たすためにも、人々の不満の声を一つの共同空間で響きわたらせる「共鳴箱」として機能すると共に、「民衆の誕生の場」である「街路」が必要なはずです。「街路」とは単なる通路ではなく、人々が共有する問題を集団で提示することでそこに公的領域を出現させると同時に、支配階級にとっては動物の「わめき声」でしかなかったものを不正を訴える人間の言葉として響かせる場です。それはまた、存在しないと思われていた民衆が、どこからともなく現れてくる場でもあるでしょう。

□沖縄の〈声〉と呼びかけあう私・たちの「政治表現」とは

以上のような、「民衆にとって政治とは何か」の『序論　街路への権利』をめぐる報告の後で、参加者との論議や意見交換も途中で交えながら、私・たち日本（ヤマト）の側が沖縄の〈声〉と呼びかけあう「政治表現」はどのようにありうるのかをめぐって、再び提起が行われました。

かっての沖縄での民衆の闘いに対して、「島ぐるみ闘争」という言葉がよく使われていました。先ほども「政治を路上に解き放つ」というテーマでの報告がありましたが、「島ぐるみ闘争」というと、私は、そのように、沖縄の民衆が島中の街路を埋め尽くすといったイメージを思い浮かべてしまいます。95年の「米兵少女暴行事件」も大きなきっかけでしょうが、90年代半ばから沖縄では、新たな「島ぐるみ闘争」と言ってもさしつかえないほどに、「基地にさらされる生」からの解放を求める動きが大きく高揚してきました。今、それがまさに「沸点」にまで達しつつあるように思います。

現在、沖縄の状況をめぐる運動がどのように分布しているのかを見えやすい形で示すための、あくまでも一つの「方便」として、ある図表を使いたいと思います。まず、横軸の左端に「沖縄現地」という項目を置き、右端には「非『現地』」という項目を置きます。また、縦軸の下端には「基地の『直接性』を問うレベル」という項目を置き、上端には「日本のトータルな変革を問うレベル」という項目を置くわけです。そうすると、「沖縄現地」と「基地の『直接性』を問うレベル」との間の第3象限には、沖縄での普天間基地「県内移設反対」運動といったものが入ることになるでしょう。

今日の資料として、「4・25沖縄県民大会とともに声をあげよう　東京集会」の案内文をお配りしました。その中の、「県内への移設に反対する沖縄県民の民意は充分過ぎるほどに示されています。」、「沖縄県民大会に呼応して、首都圏でも、大きな声をあげていくべく集会・デモ行進を行います。」といった文章から、主催者側のスタンスは充分にうかがえるように思います。この「東京集会」は、図表で言えば、第4象限の「非『現地』」と「基地の『直接性』を問うレベル」との間に入ることになります。

「2010年前期企画」の中でも何度か触れてきましたが、72年の「沖縄返還」の前後の時期に、自分たちに大きな苦難を負わせてきた日本国家に沖縄が「復帰」することに幻想を抱いてしまうことに対する問題提起を行ってきた、「反復帰論者」と呼ばれる論者たちがいます。その中で有名なのが、新川明（あらかわあきら）という人です。彼は、最後には、「沖縄タイムス」という地元紙の会長にまでなるのですが、そうなっても自分の何十年来の言論のスタンスを変えないという希有な人です。

第二次大戦末期の沖縄では、多くの人たちが「集団自決」で命を落としました。そこには言うまでもなく、日本軍による強制があったわけですが、同時に、日本軍に象徴されるようなナショナルなものへの帰属意識が存在しなければ、あのような集団での死ということは起きなかったはずです。沖縄の人たちが日本国家によってこれほどむごいしうちをうけていながら、日本国家への「復帰」に期待するような精神構造は、かっての「集団自決」に向かった国家主義的な意識とどれほど違うのか。そのように、「集団自決」ということが「反復帰論者」と呼ばれる人たちの思想上の「原点」となっています。その人たちは「沖縄独立運動」といった政治運動ではなく、むしろ、思想の問題として、日本国家への帰属を拒否する精神のあり方を自分たちはどう形成するのかということを沖縄の中で訴えたのです。私の理解では、沖縄の「反復帰論者」たちは、この図表の第2象限の「沖縄現地」と「日本の変革を問うレベル」との間にいることになるでしょう。

この図表で言うと、とりわけ第1象限の、「非『現地』」で「日本の変革を問うレベル」という運動がどのように存在しているかが、今、非常に見えにくくなっています。第4象限と第1象限とが交差するところに、例えば、日米安保軍事体制に反対の声をあげる運動があるはずですが、それは現在、政治的な運動としては非常に微弱なものになっているように思います。また、自分としてとりわけ、気がかりなの

日本の変革を問う	
反復帰論 （第2象限）	（第 1 象限）
沖縄現地 （第3象限） 沖縄での反基地運動	**非「現地」** （第4象限） 4・25 東京集会
基地の「直接性」を問う	

は、第3象限の現地の反基地運動と「東京集会」のような第4象限の運動との関係です。

第4象限の運動と第3象限の運動とは一見、連動しているように見えますが、本当に第4象限が第3象限につりあっているのでしょうか。自分の「生」が目の前の基地の存在の「直接性」に否応なく、さらされている沖縄や岩国の人たちが、「全ての米軍基地はいらない！」と訴えるのは、当然なことです。しかし、基地の「直接性」にさらされてはいない「非『現地』」の者たちが、「基地はいらない！」といったスローガンをそのまま口にすることだけで良いのか。沖縄の人たちと「ともに」声をあげるということではなく、むしろ、それと応答する自らの声をどうあげるのかということこそが、「非『現地』」を生きる私・たちに問われているはずです。

そのためにも、「非『現地』」の私・たちが「日本の変革を問う」という第1象限の運動を、より豊かに展開することが求められているように思います。それは、言い換えれば、「第4象限は第1象限にどこまでにじりよろうとしているのか」ということですし、逆に、「第1象限は第4象限をどのように引きよせようとしているのか」ということでもあるでしょう。

遠くから見れば、沖縄現地は「県内移設反対」ということで意志一致しているかのようですが、その中には、当然、スタンスや意見を異とする様々な〈声〉で満ちあふれているわけです。その中のどの〈声〉が勢いをもつかは、沖縄現地の運動だけではなく、「非『現地』」の運動がどうあるかに大きく左右されます。

私は、沖縄の「反復帰論者」の人たちの言葉に大きな魅力を感じていますが、先ほども言ったように、その人たちは政治運動ではなく、あくまでも思想運動として、日本国家への「復帰」反対や「日本離脱」を訴えたのです。同時に、そうした自分たちの思想をどう政治的な運動へと接続するのかということも絶えず考えていたはずです。そのことも、「非『現地』」の私・たちが、沖縄の〈声〉と応答する自分たちの〈声〉をどのようにあげるかということの中からしか、生み出されないのではないかと思います。

先ほどから触れてきた沖縄の「反復帰論者」の人たちは、島尾敏雄の「ヤポネシア論」に大きな影響を受けているのですが、その中には、日本国家への「復帰」反対を訴えた際に、「日本離脱」を唱えた人たちもいます。その人たちは、あくまでも思想の問題としてそのことを主張したわけですが、そのことは、私・たちの側としては、日本国家としてこのように統合されているあり方をどうこわすのかという課題としてあるでしょう。島尾敏雄風に言えば「ヤポネシア」ということになりますが、この列島社会をいくつもの自律的な「共和」空間の弧状の連なりとしてどのように組み立てなおすのかということが、沖縄の「日本離脱」の思想に私・たちが対応することではないかと思います。

普天間基地問題をめぐっては、沖縄の「自立・自己決定」ということが沖縄の中で唱えられています。それは、最終的には、「沖縄のことは沖縄自身で決定させろ！日本国家はその決定を認めよ」ということに集約されていくのではないかと思います。

沖縄の人たちが求めているのは、まさに「基地にさらされる生」からの解放だと思うのですが、そのことも含めて、「生の保障」や「生の無条件の肯定」ということがもっと論じられてもいいはずです。これまで、基地問題というのは、もっぱら軍事的な視点から語られてきたように思います。しかし、米軍基地による人間の存在の根底的な部分にまで及ぶ暴力や、「人間破壊」にどう対抗するのかまでも含めて、「無条件の生の肯定」をきちんと突き出すことができるかということが、沖縄と向かいあおうとする際の、私・たちの大きな課題としてあるように思います。